

草田男忌　　山田真砂年

筋雲の夕べに朱し草田男忌

藪分けてずいと出で来る岩魚釣
日照雨過ぐ裸足に痛き河原石
雲降り来もう雪渓の辺りまで
沢音の中を静かな螢かな

身から出し鑄のごとくに桃の種

我が儘を言ふまい雨の百日紅

遠く聞くまぶたの重き牛蛙

退屈な旋律のやう毛虫這ふ

牛の来て尾に追はれたる虻も来し

涼しさは雲の地を這ふ高さかな

雨戸開く音の遙かや木槿咲く

手の甲で眼鏡押し上げ百日紅

滝少しみえて万緑鉄壁に

日盛の電柱犬の尿黒し

不揃ひの高さで蕎麦の花密密

谷底を雲湧きあがる蕎麦の花

水引や山のせせらぎ暗みより

稻の花まだ真つ直ぐな穂なりけり

八月の真つ赤な舌が嘘を云ふ